

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 19 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520218

研究課題名(和文)近代宝生流能楽史の地方展開

研究課題名(英文)Research of the modern history of Hosho school of Nogaku in the provinces

研究代表者

西村 聡(Nishimura, Satoshi)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：00131269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：金沢・安江神社能舞台保存会能番組など、能楽史研究の基本資料となる番組の収集が進んだ。また、「鳴和の滝」「業平の井筒」など、絵画や地誌類の記述に研究対象を拡大するとともに、それらを活用して泉鏡花作品解釈に新見を打ち出した。さらに、和泉流狂言の演出の変遷を名古屋と金沢の実演を比較することで明らかにし、「棒縛」を題材として従来の狂言史観を見直す提案を行った。そして近代以前の資料批判を再検討し、加賀藩中期・後期の能楽の実態を詳細に記述した。

研究成果の概要(英文)：The collection of programs which became the standard documents of the history of Noh study including the Kanazawa, Yasue Shrine Noh stage preservation society Noh program advanced. In addition, I extended a study in a description of a picture and geographical books including "a waterfall Naruwa" and "a spring in connection with Narihira" and utilized them and put new views on the interpretation of novels of Kyoka Izumi. Furthermore, I compared the difference in direction in Kanazawa with Nagoya as a subject in "Bo-shibari" of Izumi style Kyogen and elucidated the change of the district development of Kyogen, and wrote a work theory which presses outlook on conventional Kyogen for a review. And I reexamined the document criticism before modern times and described the actual situation of the Kaga-han period in detail.

研究分野：人文学

キーワード：能楽 近代 地方 宝生流 和泉流 加賀藩 泉鏡花 番組

1. 研究開始当初の背景

(1) 能楽史研究の研究動向は、研究対象となる時代が中世から近世へ、地域が中央から地方へ拡大し、かつ時代間の継承や地域間の交流を見比べる方向にある。この方向の進む先には近代・現代の能楽史があり、そこでも地方からの発想、あるいは地方と中央の交流が視野に収められている必要がある。

(2) 本研究の研究代表者が『金沢能楽会百年の歩み』上・下(共編著、2000・2001)の編集・執筆を終え、科学研究費補助金の交付を受けて、「金沢能楽会を事例とする近現代能楽史の地方展開についての研究」(平成13年度～平成15年度)と同じく「近代能楽史の地方展開」(平成16年度～平成18年度)同じく「現代能楽史の地方展開」(平成19年度～平成22年度)を継続的に実施してきたのも、こうした研究動向を必然と認めてのことであり、特に地方との関係を動的にとらえる点では先端的な研究だろうとしている。

(3) 能楽史研究における「近現代」は今や最も注目を集める分野となったが、どの時代においてもまずは「中央」が研究の対象となり、やがて「地方」へ視野が広がるという流れが自然である。中世・近世ではその流れが多く研究成果の中に確認できる。しかし「近現代」の場合は、東京という「中央」が研究の主対象となる段階を未だ脱していず、「地方」を視野に入れることはあまり意識されていないように見える。

(4) しかし、本研究の研究代表者が金沢能楽会の百年の歩みを追跡し、上記3研究を実施した成果として、「地方」の能楽史には「中央」のそれと異なる独自の展開があるというだけでなく、「地方」能楽界から出た人々が「中央」能楽界の中核となり、家元やそれに準ずる立場で「近現代」能楽史の主流を形成した事実や、逆に「中央」能楽界との交流が「地方」能楽界を刺激し、復興・興隆に貢献した事実が次第に明らかになった。

(5) 本研究の研究代表者が「近現代」分を執筆した『大鼓役者の家と芸 金沢・飯島家十代の歴史』(2005)では、葛野流大鼓方飯島家における芸の継承と金沢能楽会の存続・発展が東京や他地方との交流を通して実現されてゆく過程を描き、「近現代」能楽史を精細に動的にとらえるには、こうした「地方」からの視点・発想が欠かせないと考えを強くした。

(6) 10年を超えるこれらの継続的な研究によって、「近現代」能楽史を記述する資料の収集が進み、考察すべき問題点を整理できたことを踏まえて、本研究では「中央」から「地方」を見る視点で、これまで詳細な流儀史を持たない宝生流の「近現代」を、家元宝生九郎知栄とその周辺の流儀の重鎮たちの活動を通して解明し、新たな問題の発見に到達する、「近代宝生流能楽史の地方展開」の研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

(1) 明治期の能楽界を代表する宝生16世家元宝生九郎知栄とその周辺の流儀の重鎮たちの活動を出演番組・著作・能評等の資料から詳細に把握し、近代宝生流史の展開を家元らの居る東京のみならず地方からの流入や地方への進出、また各地方の流勢の変遷などに視野を拡大して追跡するとともに、宝生流内の周辺人物が果たした役割やシテ方他流及び三役(ワキ方・囃子方・狂言方)との交流など、複合的・横断的な着眼と考察により、近代における能楽復興の軌跡を、東京中心に記述される従来の近代能楽史よりも、さらに精細かつ具体的に複線的にとらえ直すことをめざす研究であり、その核となるのが宝生九郎の活動と評価の歴史である。

(2) 具体的には、根拠資料と共演者を明示した宝生九郎年表を作成して、活動の軌跡を明らかにすること、宝生九郎の芸風と人柄、能楽史上の位置や役割について、その評価の変遷を明らかにすること、宝生九郎が出演した地方催事を地方史記述の中に確認し、地方における能楽復興との関係を、共演能楽師及び舞台・組織等の支援態勢に光を当てて明らかにすること、宝生九郎は幕藩体制下の宝生座を統括する最後の大夫であり、座付三役との関係が明治維新後どう解消、または継承されたのか、そして17世の家元継承に伴う流勢の消長やその原因を明らかにすること、などを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 能楽史研究の基本資料となる番組そのもの、または文献記載の番組の収集を継続的に行う。金沢・安江神社の能舞台保存会の番組のように今後も埋もれた資料の入手は期待できる。宝生九郎及びその周辺の人物の活動を従来より詳細に把握するためには欠かせない作業となる。同時に雑誌・新聞等における彼らの活動記録やその評価、地方自治体史における能楽関連記事の探索も必要となる。雑誌『風俗画報』や金沢・尾山神社の昇格記念出版物などが、本研究でも入手できた。さらに、掛け軸「鳴和の滝」や『卯辰山開拓録』記載の「業平の井筒」など、能を題材とする絵画や遺物の地方展開という新しい研究領域も、周辺資料の収集の結果として浮上してきた。

(2) 本研究の研究代表者は日本文学の研究(中世文学)が専門であり、上記の資料に基づく能楽史の更新をめざしているが、その一方で、文学研究としての魅力の発見も交えてゆければ、歴史記述に特色を出せるものと考えている。そのために能や狂言の作品研究を並行して行うことを続けてきた。歴史と文学の、また中世と近世の、それぞれ両方を視野に入れることを意識し、たとえば狂言の「棒縛」の演出の変遷から狂言の本質を見直したり、泉鏡花の作品と能楽の関係を従来とは異なる視点で新しい解釈を打ち出した。単に明

治期の能楽界が作品に反映しているというだけでなく、能や狂言の作品理解を踏まえることで、通説とは異なる読み方が可能になったと考える。

4. 研究成果

(1) 近代以前(加賀藩時代)の宝生流能楽史の地方展開を知る上で重要な資料となる『大野木克寛日記』が公刊されたことを受けて、能楽関連記事を網羅的に分析した論文をまとめた。本『日記』の場合は、従来他の資料により知られた番組を、これにより量的に補完するだけでなく、自筆日記としての本『日記』の信憑性が、たとえば『両御神事古今御番組』のような後年の編纂物の錯誤を訂正するよりどころとなることが明らかになり、番組を含む江戸や京都の情報に寄せる当時の関心、それらからの影響、加賀藩の公式行事における筆者周辺の職務の実態、藩主の慰み能や藩士の稽古会が伝える私的な親炙の程度、その浸透に欠かせない役者の働き、家と芸の継承の在り方などが具体的に詳細に把握された。宝生流能楽史の地方展開の前史を今までにない詳細さで明らかにし、通説を補足・訂正することが多く、かつ能楽史記述にその依拠資料を明示し、依拠資料の読み方を検証することの重要性を示す点で意義がある。

(2) 金沢と名古屋の和泉流の狂言史を通史として記述することを行った。そういう地方展開の視点での記述自体が従来あまり詳細にはなされてこなかった。記述の過程で、先行研究が加賀藩5代藩主の時代の番組を含むとしていた金沢市立玉川図書館蔵『御能方』を検証した結果、すべての番組が12代・13代藩主の時代の番組であることを明確にした。狂言の具体的な作品としては「棒縛」を取り上げ、同じ和泉流でも金沢と名古屋とでは演出が大きく異なることを、実演及びその記録(音声・映像)に基づく詳細な分析により明らかにした。さらに、「棒縛」という具体的な作品の分析を通して、古態の狂言にはいわゆる下克上の「抵抗の精神」が鮮明に見取れるであろうという従来の狂言観に見直しを迫ることができたところに意義があると考えている。なお、関連して本研究で入手した金沢大学所蔵狂言本の解題と翻刻、和泉流野村万蔵家と大蔵流山本東次郎家の比較解説などを行った。また、北陸を舞台とする能の作品世界を概観する短編の論文及び金沢大学日中無形文化遺産プロジェクトの5年間を総括する報告を行った。

(3) 近代宝生流能楽史の地方展開をより詳細・具体的に把握するための基礎資料の収集に大きな進展が見られた。一つには明治41年から大正2年にかけて金沢・安江神社能舞台で行われた同神社能舞台保存会開催の番組がまとまって入手できたことが挙げられる。ちょうど近代能楽史の最隆盛期に当たり、宝生流の能楽が金沢という地方都市でどの

ように展開したかを番組掲載の催しの規模や演者の名前から知ることができる。また、同保存会の趣意書も綴じ込まれていて、設立の経緯や変遷をたどるのに有益であり、従来より広い視野のもとに近代宝生流能楽史の地方展開を追跡することが可能になった。さらに、同じく入手できた「金沢紳士鑑」、尾山神社昇格記念出版物たる「高德公事略」、「梅薫録」、雑誌『風俗画報』等によっても、明治期後半の宝生流能楽の地方における隆盛を具体的に知ることができ、従来の近代能楽史記述を更新・充実させる資料が揃いつつあることは、本研究にとって大きな収穫といえる。

(4) 周辺資料の収集に関しては、弘化5年の宝生大夫勲進能の番組や、掛け軸「鳴和の滝」図も入手できた。後者は能「安宅」の詞章の一部が名所化した上で絵画化されたものであり、地元の絵師の手に成ると推定されるが、こうした絵画化の例は資料を増やすことで、新しい研究課題に発展する可能性もある。このほか、明治維新前後の数年、金沢・卯辰山の開拓に伴い、能楽ゆかりの「井筒」が一時期卯辰山の名所となった経緯や、また泉鏡花の作品との関係で注目される景物を確認するために必要な情報を掲載する『卯辰山開拓録』を入手し、その分析結果を口頭発表し、近代宝生流能楽史の周辺を資料から光を当てる試みを続けている。

(5) 能の作品研究では、「隅田川」の結末を悲劇とする通説に対して、梅若丸の蘇生はもとよりかなわないが、その面影を見ることが大念仏のかいあってかなう奇跡であるという新見を提案した。また、世阿弥の軍体作品に関して、《美しい幽霊》と《生の物語》をキーワードに、人生を総括し、かつ見る者の正視に耐える修羅の確立を見通した。ほかに、「夕顔」「安宅」等について短編の論文を発表した。いずれも通説に解釈の見直しを迫り、新たな問題を提起して、作品研究の可能性を広げる論考であると考えている。さらに、世阿弥の能楽論に関して、『申楽談儀』の語りごとと書くことを論じた論文、『花伝』研究書の書評を執筆・発表した。

(6) 結果的に最終年度となった平成25年度は、近代宝生流能楽史の地方展開を泉鏡花作品の中に看取するとともに、能楽史研究の側面から泉鏡花作品の研究を更新することに具体的な成果が得られた。特に、金沢を舞台にした泉鏡花作品の内、『照葉狂言』の舞台設定や結末の解釈に新見を呈示することができた。主人公の貢が峰の松をめざして坂道を上る時、曲がり角で聞こえてきた「松風」の謡を、通説は「松風」の内容を『照葉狂言』に重ねて読む傾向があるが、それでは貢の迷いは強まり、坂道を上れなくなるはずである。貢は「松風」の詞章の意味ではなく、その声の清らかさ、妙なる音調に心惹かれたのであり、石段三十五階の坂道は、貢が大人の芸の世界とその広さに目を開く、入口への最後の

階段であるとした。能楽研究の側から泉鏡花作品の研究を更新する意義があると考え。 (7) これらの泉鏡花作品の研究には、同時代の地図・絵図だけでなく、前年度に入手した『卯辰山開拓録』の記述や挿絵から有益な示唆や根拠を得た。同書及び『稿本金沢市史』等、同時代の歴史・地誌を用いて、『鶯花径』『妙の宮』『卯塔場の天女』『由縁の女』等の諸作品を論ずる基礎が固まったといえる。そして、『卯辰山開拓録』の記述や挿絵からは、能「井筒」の遺物としての「業平の井筒」が、明治初年に卯辰山の名所になっていた事実がうかがわれ、金沢における「業平の井筒」の変遷は大阪における石の井筒の流転と結びつくことも、近世の随筆・地誌類の記述・挿絵から判明した。これまで能楽の地方展開といえば、流儀の消長や役者たちの交流に注目しがちであったが、作品世界の景物が物として形を獲得し、その伝承が時代や地域を越えてゆくことにも、能楽の文化史への影響力の大きさが見て取れることが分かり、今後の研究の重要な視点としてゆきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 13 件)

西村 聡、『照葉狂言』の松風、『卯辰山開拓録』の井筒「日暮の丘」周辺をめぐる一考察、金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇、査読無、6号、2014、1-20

西村 聡、書評尾本頼彦著『世阿弥の能楽論「花の論」の展開』、藝能史研究、査読無、No.204、2014、60-62

西村 聡、『申楽談儀』を語ることと書くこと、能と狂言、査読無、11号、2013、125-133

西村 聡、金沢大学本狂言集 解題と翻刻、金沢大学歴史言語文化学系論集、査読無、5号、2013、1-20

西村 聡、安宅における立衆と地謡、廣田鑑賞会第20回解説パンフレット、査読無、2013、8-9

西村 聡、和泉流野村万蔵家と大蔵流山本東次郎家、新春狂言の会パンフレット、2013、8-8

西村 聡、世阿弥作品の軍体と名乗り 美しい修羅の自画像、観世、査読無、第79巻第11号、2012、32-40

西村 聡、夕顔の世語りと菩提、廣田鑑賞会第19回解説パンフレット、査読無、2012、8-9

西村 聡、無形文化遺産保護と能楽研究、金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書総括報告書、査読無、2012、9-13

西村 聡、和泉流狂言史の金沢と名古屋、金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第17集、査読無、2012、1-32

西村 聡、棒縛の演出とその変遷 金沢と名古屋の比較を視点に、金沢大学日中

無形文化遺産プロジェクト報告書第17集、査読無、2012、54-73

西村 聡、『大野木克寛日記』から見た加賀藩中期の能楽、藝能史研究、査読有、No.194、2011、14-28

西村 聡、能の作品世界と北陸、国立能楽堂、査読無、第338号、2011、30-33

〔学会発表〕(計 1 件)

西村 聡、『申楽談儀』を語ることと書くこと、能楽学会、2012年8月8日、奈良国立博物館(奈良県奈良市)

〔図書〕(計 3 件)

西村 聡、金沢大学国際文化資源学研究中心、文化資源情報論、2013、123-133

西村 聡、金沢市、図説金沢の歴史、2013、94-95

西村 聡、竹林舎、中世の芸能と文芸、2012、195-213

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 聡 (NISHIMURA, Satoshi)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 00131269

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: